

**Contents**

1. AED 功労賞受賞者インタビュー ～小学校 5 年生による救命～
2. 2020 年度 AED 功労賞報告

1. AED 功労賞受賞者インタビュー ～小学校 5 年生による救命～

突然、心停止に陥った人の救命には現場の市民の協力が欠かせない。しかし、そのような協力は一体何歳からできるのだろうか？ 2019年7月30日、神奈川県内の小学5年生優輝君（当時11歳）が、救急隊到着までの6分間、1人で心臓マッサージ（胸骨圧迫）を行って父親（42歳）の命を救った。財団ではこの国内史上最年少による救命に対し、2020年功労賞最優秀賞を贈呈し称えた。優輝君は小学4年生のときに学校で救命講習を受けており、それが奏功した形となった。春休みの3月27日、当事者である親子4人全員が財団事務所に訪れた際に、理事長の三田村がインタビューをさせていただいた。

一家団欒のときに突然・・・

三田村： その日のことを思い出しながら順々に教えて下さい。

父親： 体調はいつもと変わりませんでした。その日は火曜で、夜に仕事が入ったので帰りが10時過ぎになる、と家内に伝えていました。

母親： 子供たちは先に夕食を済ませていましたが、夫の仕事が急にキャンセルになったと言って8時半くらいに帰ってきました。それから夫は夕食をとって、9時30分頃には終わったと思います。普段ですと子供達は夜9時にはふとんに入らせて、遅くても10時には寝かせるようにしていたのですが、その日はお父さんがいるし、夏休みで翌日の予定もなかったのも特別に10時半までゲームをやってもいいよ、と言って、私は風呂に入りました。風呂から出たときにたまたま時計をみたら10時38分で、まだ子供達が遊んでいたの、「あれ、もう10時半過ぎてるよ。ゲームを止めて寝なさい」と言いました。

父親： お母さんのその声を聞いてテレビゲームの後片付けをしていたところまでは覚えていますが、そのあとは全く記憶がありません。

三田村： そこから先のことは、見ていたまわりの人しかわかりませんね。

優輝： お父さんは居間の床の上に座って壁を背もたれにするようにしていたんですけど、突然、「ウー」と唸り声をあげました。

妹： 左手を「ぐー」のように力を入れて握ったまま腕を突き出すようにして、伸びでもしているのかなって思った。ちょっと怒っているような顔をしていた。

三田村： へー、よく覚えているね。目はどうだった？

妹： 目は開いたまま。まっすぐ前を見つめているみたいだった。

母親： 「ウー、ウー」と言っているのが最初は怒っているのかとも思ったのですが、怒られるようなこともなかったの・・・「お父さん、どうしたの、大丈夫？」と言っても返事がなく、そのうち壁に寄りかかって座っていたのがズルズルと崩れてきました。顔色も赤紫っぽくなってきて、口から泡も吹き出して。それで3人でお父さんを仰向けに床の上に寝かせたのですが、そのときに優輝が「救急車呼ぶ？」と聞いてきました。

妹： 居間の机の上にお父さんの iPhone があつたのでそれを手に取ったけど、ロックがかかっていたので、解除しました。

三田村： えっ、どうやって？

妹： 「緊急通知ボタン」を押しただけ。大分前に「突破ファイル」というテレビの番組でそうやっていた。みんなもその番組を見ていたけど、私だけ覚えていた。

三田村： 見ただけで覚えているなんて凄い。それもかなり前のことですよ。



優輝： お母さんが「110 番だっけ？」というので、「違よ、119 番だよ」と教えてあげました。

妹： お母さんが一番慌てていた。

優輝： 通知ボタンを押したのは妹で、指令室から「火事ですか、救急ですか」と聞かれて「救急です」と言ったのは僕。でもそのあとは母がそのスマホを取り上げて話していました。それで僕はお父さんの胸に自分の耳をあてたけれど心臓の音が聞こえなかったのので、すぐに心臓マッサージを始めました。

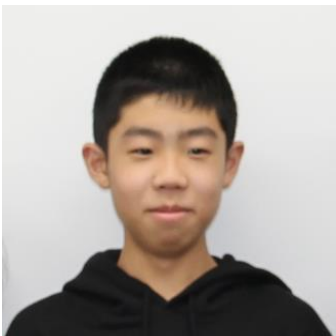
三田村： 耳をあてて心臓の音を聴くなんてよく知っていたね。それで心臓マッサージをすぐに始めたんだ。

母親： その間、私が指令室の人に状況を伝えました。後から消防の人に聞いたら入電が 10 時 42 分だったそうです。指令室の人に「肩を叩いてみて」と言われ、息子を横にどかせて肩を叩いても反応はありませんでした。「呼吸は？」と言われ、時々急に深く息を吸い込むような動きもあったので「ある」と一度は答えたんですけど不安だったので、優輝に「呼吸はある？」と聞いたら、「お母さん、呼吸していないよ」と言われてしまいました。

三田村： そういうときの呼吸の見方は難しく、まともな呼吸をしているかどうかポイントなんだけど、さすが優輝君、冷静に判断できたんだね。

母親： 息子が心臓マッサージしていることも伝えました。そんな説明をしているうちに「救急車が今、出ました」と相手が言ったので、電話を切りました。すぐに救急車が来そう、となったんですけど、これから病院について行くのに自分はまだ風呂上がりの格好だったので、あわてて着替えて、救急車を迎えに外に出ました。

三田村： そうすると心臓マッサージは優輝君がずっと 1 人でやっていたの？



優輝： ずっと 1 人で「死んじゃダメ」「早く戻ってこい」と

言いながら心臓マッサージを続けていました。疲れたとかは思わなかった。

妹： お兄ちゃんが心臓マッサージをしていて、お母さんが外に出て私と二人だけみたいになって、大丈夫なのかな、と思った。

救急隊が到着し、病院へ

母親： 外に出たらすぐに救急車のサイレンが聞こえて、家の前に止まりました。消防車のサイレンの音も聞こえました。後で聞いたことですが、そのとき、家から歩いて 15 分くらいのところにある消防署の救急車は出払っていて、たまたますぐ近くの病院に患者を運んで戻ろうとしていた別の管轄の救急車が駆けつけてくれたそうです。到着したのは 10 時 48 分、電話してから 6 分後だったと後で聞きました。家が 3 階にあったので、急いで下まで降りて行って上に案内しました。

三田村： 救急隊が来てくれてホッとしたでしょう。

優輝： すぐに心臓マッサージを代わってくれて、そのあと AED の準備をしていました。

三田村： 妹さんはその間ずっと見ていたの？

妹： 救急隊の人が「皆離れて、見ない方がいい」と言うのでお兄ちゃんと部屋から出たけど、そうっと隙間から覗いていました。電気ショックのときはお父さんの足がピクンと跳ね上がっていました。

優輝： そのあとも救急隊の人が心臓マッサージを続けて、少しすると救急隊の人が「戻った」と言う声が聞こえました。

三田村： 戻った、というのは優輝君もわかったの？

優輝： お父さんのおなかが上下に動くのが見えました。息をしている、と思ったけれど、まだ意識はなかった。

三田村： お母さんはそのあと、ご主人について一緒に救急車に乗り込んだのですよね。

母親： そうなんですけど、自分だけ一緒に救急車に乗ると、子供達を家に残すことになると思ったので、車で 20 分くらいのところに住んでいる実家の両親に急いで電話してこっちに来て子供達の面倒を見て、と頼みました。子供達にも、すぐに来てくれるから待っていて、と家のカギを預けて家を出ました。保険証も持って。

三田村： 着替えもそうですけど、大変なときにそこまで気

を遣わなければいけなかったのです。ご主人の意識はどの辺で戻ってきたのですか？

母親： 救急車に乗り込むとき、夫が目を開けたのがわかりました、ただ開いた、という感じです。救急車の中で救急隊員からの問いかけに名前が言えたらしく、もうしゃべれるんだ、とホッとしました。

三田村： 病院にはすぐ着いたのですか？

母親： 近いのですぐでした。11 時頃に着いたと思います。急患室には入らせてもらえませんでした。大分経ってから集中治療室に移るために出てきました。夫はいっぱい点滴につながれた状態でしたが、何があったかわからない、という感じでキョトンとした顔をしていました。「大丈夫？」と聞いたら、「うん」と言ったのを覚えています。先生からも、もう大丈夫、と言われホッとしました。

三田村： お父さんご自身はどの辺りで気づいたのですか？

父親： 急患室の中で寒さで目が覚めたのですが、最初は見慣れない天井が見えて「ここはどこだろう」と思いました。体に点滴やら色々なコードが繋がれていて「何があったんだろう」という感じでした。看護師さんの問いかけに「寒い」と答えたのを覚えています。

三田村： 子供達はその間、家で心配だったでしょう。

妹： 私は最初はパニックになっていたけど、お父さんが病院に運ばれて行って少し安心して冷静になった。反対にお兄ちゃんはまだ冷静だったけど、皆がいなくなったら急に不安になったみたい。

三田村： でもおじいさん、おばあさんが来てくれたから、安心できたんじゃないの。

母親： それで、両親が子供達を病院に連れてきてくれたんです。一段落したときに私が病院から電話すると、子供達を実家に連れて行こうと準備をしているところでした。ただそうするとカギも一緒に持って行ってしまい、自分が後で家に入れなくなることにその時、気づきました。なので夜中の 0 時頃でしたけど、病院まで連れてきてもらいました。

三田村： それは大変でした。それで病院で子供達はお父さんに会うことはできたんですか？

母親： お父さんは集中治療室にいて、そこには 15 歳以下の子供は入室禁止でしたのでその手前で落ち合い、中には入れませんでした。私だけは家に帰る前にちょっとだけ主人に会わせてもらいま

したが、既に落ち着いた状態の主人と普通に会話できたのに驚きました。

三田村： そうでしたか。結局、病院からは 3 人で夜中に家に帰ったわけですね。遅かったでしょう。

母親： 家に着いたのは夜中の 1 時半でした。

三田村： 親にとっても子供達にとっても大変な 1 日でしたね。お父さんの方はその後どうだったのですか。

父親： 本当に皆のおかげですぐに回復して、後遺症もなく元気になりました。これまで健康診断でも特に異常を指摘されたことはなかったのですが、心室細動が突然起こった原因を調べて、最終的に ICD という小型除細動器を胸の中に埋め込む



手術を受けました。

実は講習を受けていた

三田村： お父さんの救命には家族全員の素早いチームワークが役立ったわけですが、皆さんは救命法というものを以前から知っていたのですか。

母親： 小学校で前の年、優輝が 4 年生のときに消防署の人が学校に来て救命の授業がありました。これは担任の先生方が消防署にお願いして実現したと聞いています。今は 5 年生に対してやっていますが、そのときは 4 年生にやってもらえたので優輝も受けることができたわけです。

三田村： それはラッキーでしたね。どんな救命授業だったのですか。

優輝： 3 クラスが合同で体育館に集まって、45 分間の講習でした。そのときにはキュッキュと音の鳴るハート型のクッションを利用して心臓マッサージの訓練もやりました。胸の真ん中を 5 センチ位押す、ということもそのとき教えてもらいました。速さは消防の人が実演してくれたので、その音を聞きながらやったので大体わかりました。

三田村： 講習のときと実際のときとは何か違っていましたか。



優輝：実際にはお父さんの胸の方が硬かった。あのときも消防の人が替わって心臓マッサージをしたら、胸の圧迫がドッコン、ドッコンという感じで、あんなに強く押すんだ、もっとやれば良かったと思いました。

AED が設置されているか知ってる？

優輝：体育館と職員室の廊下側に合計 2 台の AED が設置されている。

三田村：優輝君は AED について習ったことはありましたか。

三田村：家の近くでは？

優輝：見てはいたけど、それに触ったことはありませんでした。

優輝：家から近いところは、駅の改札口や老人ホームにも AED がありました。後で知ったんですけど。

三田村：AED も簡単だから知っているのと役に立ちますよ。使い方だけでなく、どこにあるかを知っていることも大事。例えば優輝君の学校ではどこに

三田村：そういうことも知っている、これからも緊急のときにきっと役立つね。

4 月から中学 1 年になる優輝君と、小学 5 年生になる妹さんは財団事務所で AED に触り、すっかり自信をつけたようで、喜んでいました。お父様は「本当に子供達に感謝しかない、子供の心臓マッサージで何の後遺症もなく助かったのは本当に有り難い」と話していました。AED の威力も実感されたようで、「体力がまだ不十分で心臓マッサージを満足にできない小さい子供達でも AED は使いこなせると思うので、小学校で AED の実習が拡がって欲しい」とも、強くおっしゃっていました。

インタビューを振り返って

● 日本 AED 財団 理事長 三田村秀雄 ●

自宅で大黒柱の父親が突然、意識を失う、という一大事に遭遇したときに、半ばパニックになりつつも、ここまで迅速かつ的確に対応できた例を知らない。救命のポイントは初動にあるが、即座に心停止を疑い、119 番通報、心臓マッサージに着手したことは素晴らしいというしかない。これまで心停止は倒れて意識がない、反応がない、呼吸がないことがそれに気づくポイントとされてきたが、実際には手を突っ張り、顔はこわばって目を見開き、1 点を見つめてうーと声を出す、といった一連の特徴があった。このような「心停止特有の動き」は医療関係者ならばしばしば目にしてきたものであるが、そのような重要な知識がこれまでの救命講習で共有されてこなかったのは反省点であろう。



今回、このような誰でも慌ててしまう場面で冷静さを保っていたのは、驚いたことに小学生の子供達だった。父親の急変の様子をしっかりと観察し、覚えていたのは家族の中でも最年少の妹さんだった。一方、優輝君は直後から心停止を疑っていた。目撃した上記の特徴に加えて、正常の呼吸をしていないことを冷静に判断していた。さらに耳を父親の胸にあてる、という聴診技術を咄嗟に活用したことにも驚かされた。これも一般の講習では教えられていない、音を聴いたことのある人にしかできないコツと言えるかもしれない。そして実際の心臓マッサージのレベルが高かったことは、心室細動が 6 分間以上続いたのに、1 回の電気ショックで除細動に成功し、なおかつ救急車で意識が回復し、何の後遺症も残さなかったことによって明らかであるが、まさに驚異的という以外にない。

救命には家族の一人一人がそれぞれの役割を果たしていた。優輝君の心臓マッサージはもちろんその代表と言えるが、妹さんがスマホの緊急通知ボタンを押して即座にロックを解除したことも大きな助けになった。そして母親は 119 番に状況を説明して救急車の発進を促すと、すぐに一緒に救急車に乗り込むことを想定し、着替えをすませて救急車を迎えに行き、さらには両親に子供達の世話を手配するといった主婦らしい細かい気遣いを見せた。

振り返ってみると A さんの救命にはいくつかの偶然が重なっていた。当日は仕事のキャンセルで早めに帰宅できたこと、夏休みで子供達が遅くまで起きていたこと、奥様が風呂を終えた後の出来事だったことなどである。しかし偶然ではない日頃の学習がこの快挙につながった最大の要因であることを見逃してはならない。優輝君が小学 4 年生のときに救命講習を学校で受けていたこと、さらには妹さんがテレビ番組で見たスマホの緊急通知ボタンのことを覚えていたことが大きく救命の成功につながった。日頃の教育の重要性を改めて思い知らされた次第である。今回、小学 4 年生への救命授業が有効性の高いものであることが実証されたことの意義は大きく、全国の小学校にこの事実を知っていただき、救命講習を広く実践していただくことを強く願っている。



2. 2020 年度 AED 功労賞報告

AED功労賞 おめでとうございます!

最優秀賞

『小学生が父親を救命 ～救命の連鎖～』

●齋藤 優輝 様●

内容：齋藤優輝君(当時小学5年生)は、突然目の前でお父さんが倒れるという状況に遭遇した。驚いたものの、心臓が止まったのではないかと冷静に判断して家族に119番通報をお願いし、その後も救急隊が来るまで胸骨圧迫を実施し続けた。AEDを持ってきて電気ショックを行ったのは救急隊であったが、優輝君の判断と行動、家族の連携により父親の命は救われた。

横須賀市消防局が小中学生向けに開催している「スクール救命教室」を受講していたことが功を奏した一例である。今回の事例で小学生から救命知識を持つことの重要性が立証された。



優秀賞

『家庭ごみ収集車へのAED搭載

～市民の命を守るための取り組み～

●春日部環境衛生事業協同組合●

内容：春日部環境衛生事業協同組合では、可燃ごみの収集車27台にAEDを搭載させて“走るAED”として回収作業を行っている。また、組合員に普通救急救命講習を定期的に受講させ、市民の安心・安全な生活を守る取り組みを行っている。ごみ収集中の救命事例もある。



(左：春日部市長)

優秀賞

『巡回車への AED 設置・公共施設内での AED 貸出し

～町民への AED 普及推進活動～

●一般財団法人どんぐり財団●

内容：一般財団法人どんぐり財団は、北広島町内を巡回する同財団所有の公用車すべて(4台)にAEDを搭載させて、不測の事態に備えている。また、同財団が管理している施設を利用するスポーツ団体にAEDを貸し出す取り組みの導入や一般市民向けにAEDの講習会を実施するなど、AEDの普及推進に努めている。職員と利用者の連携による救命事例もある。



※これは AED の JIS マークです

公益財団法人 日本AED財団

東京都千代田区内神田2丁目7-13

山手ビル3号館1階

TEL : 03-3253-2111

FAX : 03-3253-2119

E-mail : info@aed-zaidan.jp

HP : http://aed-zaidan.jp/